聖使徒行実の読み（16：16 ～ 34）

謹みて聴くべし

彼の日、使徒等が祈祷の所に適きし時、卜筮の鬼に憑らるゝ一の婢、我等に遇へり、卜筮を以て其主に多くの利を得しめたる者なり。彼はパウェル及び我等に従ひて、呼びて曰へり、『此の人人は至上なる神の諸僕にして、我等に救の道を傳ふる者なり』。日、久しく之を行ひしに、パウェル遂に之を厭ひ、顧みて鬼に謂へり、『我、イイスス・ハリストスの名を以て、爾に彼より出づるを命ず』。鬼、忽出でたり。婢の主は其利の望の空しくなりたるを見て、パウェルとシラとを執へて、市に有司等の前に曳けり。既に上官に曳き來りて曰へり、『此の人人はイウデヤ人にして、我等の邑を擾し、我等、ロマ人に受くべからず行ふべからざる例を傳ふ』。民も亦齊しく起ちて、彼等を攻め、上官は彼等の衣を褫ぎ、命じて彼等を杖うたしめたり。多く杖うちて後、獄に下し、獄吏に固く彼等を守らんことを命ぜり。獄吏、是くの如き命を受けて、彼等を内獄に下し、其足に梏を加へたり。

夜半の頃、パウェル及びシラ、祈祷して、神を讃詠せり、囚者之を聞けり。俄に大なる地震ありて、獄の基動き、諸門、皆、忽、啓け、各人の械は解けたり。獄吏、醒めて、獄の諸門の啓けたるを見て、囚者、逃げたりと意ひ、刀を抜きて自殺せんと欲せり。然れどもパウェル大なる聲を以て呼びて曰へり、『自ら戕ふ勿れ、蓋、我等、皆、此に在り』。彼、火を索めて、躍り入り、戦きてパウェル及びシラの前に俯伏し、彼等を外に導き出して曰へり、『君よ、我何を爲して、救を得べきか』。彼等曰へり、『主、イイスス・ハリストスを信ぜよ、然らば爾及び爾の全家、救を得ん』。乃、主の言を彼及び凡そ其家に在る者に傳へたり。彼は夜の即時に彼等を取りて、其傷を濯ひ、直に自ら其全家族と洗を受けたり。遂に彼等を引きて、己の家に入れ、食膳を具へ、全家と偕に神を信ぜし事を喜べり。